令和5年度「東海村まちづくり出前講座」

「東海村まちづくり出前講座」は、村の行政について、もっと知りたい、勉強したい、考えたいなど、さまざまな団体の要請に応じて、皆さんの学習の場に役場の職員を講師として派遣するものです。

期日▼通年（12月28日～１月４日を除く）
時間▼午前９時から午後９時までの２時間以内
場所▼村内公共施設等（会場は村内限定）※会場の手配や準備は、各団体でお願いします。
対象等▼村内在住・在勤・在学で、５人以上で構成される団体
内容▼講座メニューは政策推進課（役場行政棟３階）や各コミュニティセンター、村立図書館に備え付けてあるほか、村公式ホームページからもご覧いただけます。
費用▼無料 ※施設の使用料や村で準備できない材料等については、各団体の負担となります。
申し込み▼所定の申込書に必要事項を記入の上、講座実施希望日の14日前までに、講座の担当課へ申し込みください。※講座の実施日は、講師の都合等により調整させていただく場合がありますのでご了承ください。
問い合わせ▼政策推進課計画調整担当（☎282-1711 内線1337）

▲HPはこちら

ふるさと歴訪 ～自然を探して～

マツのこぶ病

慶應義塾大学准教授 糟谷 大河

東海村の海岸に広がるクロマツやアカマツの林は、古くから人々の手によって植林、間伐、下草刈りや落ち葉かきなどの管理が行われ、保全されてきました。村の人々にとって、マツ林は防風・防砂の役割を果たしてきただけではなく、生活するための資源を得る場でもありました。マツ林では、食用となるキノコが得られ、マツの落ち葉は堆肥などに利用されてきました。

しかし、時代の流れとともに生活様式が移り変わったこともあり、最近ではマツ林の下草刈りや落ち葉かきといった管理もあまりされなくなりました。その結果、林床には落ち葉が厚く堆積し、下草も生い茂るなど、林内の環境も変化し、マツの生育に適さない状態となってしまった場所も見られます。

こうした林では、樹勢が衰えたマツを狙ってそれらに寄生する菌類（キノコやカビの仲間）がまん延し、その結果、マツが病気に感染します。その一つがマツのこぶ病です。この病気は、マツの幹や枝の一部が肥大してこぶのようになるものです。こぶは始め豆粒くらいですが、年々成長して肥大化し、直径30センチメートル以上に達することもあります。こぶの内部は健全な部分より柔らかいため害虫などが侵入しやすく、また風にも弱いため、しばしばこぶの部分からマツが枯損します。

こぶ病は、サビキンの一種のマツ類こぶ病菌により起こります。この菌は、クロマツやアカマツと、コナラやクヌギなどのブナ科の広葉樹との間を行き来して生存します。初夏から秋は、コナラやクヌギの葉に感染するこぶ病菌ですが、これらが落葉する晩秋から冬にはマツに移動し、こぶの内部で組織を肥大させながら越冬します。そして春から初夏、こぶの表面に現れた胞子が風や雨水により分散し、コナラやクヌギに再び感染します。東海村の海岸のマツ林にはコナラが混生することが多く、こぶ病菌にとっては絶好の生育環境となっているのです。

【アカマツの枝に現れ、胞子を形成したこぶ病（村松地内にて）】